第５回シンポジウム―1

趣旨と概要

押川文子

近年、著しい成長を遂げつつあるインド。中間層の成長に耳目が集まるなかで、人々の暮らしや社会関係はどのように変化しているのだろうか。経済機会の拡大のなかで、格差や不平等、貧困は、どこで、どこまで縮小しているのか。そしてそのなかで人々は政治や運動に何を期待しているのだろうか。南アジアの「現代」を対象とする第5回シンポジウムでは、農村部や都市貧困層などを対象にしたミクロな調査報告をもとに、経済成長下のインドの社会の変化の性格を考えた。

本シンポジウムでは、インド社会の変化を、「機会」、「移動」、「リンクする人々」３語をキーワードとして捉えることを試みる。カーストや土地所有などの構造的要因に強く規定されてきたインド社会に、少しずつ、そして偏りをもちながら拡大する新しい上昇の機会。その機会をつかむために、学歴、職業／所得など個人や家族に帰属する資源の獲得を目指して、移動し、あるいは数世代をかけて新しい社会関係を築こうとする人々。こうした個単位の多様な資源獲得の動きを「リンク」と呼ぶことによって、経済自由化以前から進行していた社会変化と今日の変化を、連続的に、そして個人や家族の視点から、以下のプログラムにより、再考することを試みた。

・柳澤悠　村民にとっての機会の変化と「農村」の変容
・近藤則夫　村人と開発行政―退出と参加―
・黒崎卓　労働移動とネットワーク、都市貧困―デリーのリキシャ引きの事例から―
・押川文子　多層化する学校と「機会」―デリーの事例から―
・竹中千春　グローバル・インドの国民国家と民主主義

柳澤報告は、1980年代から成長を続けるインド経済を支えてきた重要な要因は、農村地域の変化であるという視点から、南インドの農村の事例から、1980年からの変化を報告した。

近藤報告は、保健衛生、初等教育、農業技術普及、貧困緩和などでは公的部門の役割について、北インドの一事例においてその実態を村人の評価を通じて提示し、村人がその実態を前にどのような選択を行い、また、どのような機会を捉えて、自らの生活を向上させようとしているのか報告した。

黒崎報告は、農村部門での生計向上の流れに乗り切れない貧困層が都市部への移動が、どの程度の階層上昇をもたらし、どのような要因が、都市への移動後に、所得の向上と長期的な貧困脱出につながるのか、都市部の貧困層として定着する可能性はどのくらい高いのかなどの点を、ネットワークをキーワードにデリーのサイクル・リキシャ引きの事例を検討することにより、考察した。

近年インドでは、政府系学校についても、弱者層を対象に「質の高い」教育機会提供を目指す学校が設置されるなど、一定の改革が実施されている一方、拡大の続く私立学校では、新しい資本の参加や国際化が進行し、「学校の市場価値」も、学歴獲得志向から創造性や感性教育重視まで多様化が一層顕著になってきた。押川報告は、デリーを事例に、こうした学校の「複層化」の状況を報告するとともに、世代を越えて機会を拡大しようとする子どもと保護者にとっての「学校選択」の意味を考察した。

多くの人々が、国境を含めたさまざまな境界線を越えている。このような人々の動きは、国民国家の下にある政治のあり方にどのような衝撃を与えているのだろうか。一国の民主主義の枠内での新しい要求の噴出や人々のネットワーク形成は、このような変動とどのようにリンクするのだろうか。竹中報告は、1990年代から2000年代の政治的な勢力配置と政治的な言説の変化を捉え直しながら、そうした変動の意味をインド、南アジア、そしてグローバルな政治の視点から検討した。

おしかわ ふみこ　●京都大学地域研究統合情報センター（osikawa@cias.kyoto-u.ac.jp）